

学位審査報告書

新制

人

113

(ふりがな)	はやし しんぞう
氏 名	林 信蔵
学 位 (専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人博 第 461 号
学 位 授 与 の 日 付	平成21年3月23日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	人間・環境学研究科 共生文明学専攻
(学位論文題目)	
ゾライズムの射程 —永井荷風の初期作品をめぐって	
論 文 調 査 委 員	主査 教授 稲垣 直樹 副査 教授 松田 清 副査 准教授 須田 千里 副査 准教授 多賀 茂

人間・環境学研究科

(論文内容の要旨)

本学位申請論文は、永井荷風(1879-1958)の初期作品(1902-1903)とエミール・ゾラ(Émile Zola 1840-1902)のテキストとの比較検討を通して、荷風の初期作品に与えたゾラの影響を登場人物やプロットの設定など物語レベルのみならず、文体およびナレーション技法の面からも解明しようとしたものである。荷風がその文学的営為の初期にゾラを愛読したことが、その後の荷風の創作にどのような意味を持ったかについても併せて考究している。

第一章では、荷風の初期作品の執筆時期と、荷風が読んだとされるゾラの英訳のエディションを推定した。まず荷風の初期作品のなかで、執筆時期を特定するための手がかりが比較的多い作品について考察し、そのうえで、他の作品との執筆時期の前後関係に特に注目しながら、荷風の初期作品の執筆過程全体を推定した。一方、荷風が読んだ英訳のエディションの特定は、荷風自身がエディションを明かしている作品を除くと、資料の不足のため困難な場合が多かった。しかしながら、当時日本で入手可能であったゾラの英訳のエディションは、お互いに似通ったテキストである場合もあること、また、荷風が特定のエディションを選ぶ動機があることを指摘することで、比較のための最低限の蓋然性を確保することができた。

このような準備段階を経て、第二章では、ゾラの文学理論の中心である自然主義を荷風がどの程度理解し、初期作品の執筆に生かしたかを主に論じた。荷風にとって自然主義理論を理解するための重要な手がかりは、ゾラの『制作』(*L'Œuvre* 1886)に登場する作家サンドーズが語る文学理論であったと考えられる。『制作』を評しながら荷風は、サンドーズこそがゾラの分身であり、サンドーズの言説からゾラ其自然主義理論の基本原則を知ることができると述べているからである。その文学理論から荷風は、作中人物の行動を生理学や遺伝学を援用しながら説明するという「生物学的リアリズム」のコンセプトを摂取すると同時に、作中人物に対する環境の影響を考慮することの重要性を理解した。荷風の初期作品の中で「生物学的リアリズム」が本格的に応用されているのは『地獄の花』(1902年9月刊)である。水沢という作中人物がアルコールによって正常な思考を失い、暴力性をむき出しにするまでの過程が生理学的に叙述されている。さらに、この水沢の暴力性は、「野獣の力」とも形容されているが、このような表現にはゾラの『獣人』(*La Bête humaine* 1890)からの影響を見取ることができ、この作品には、19世紀に生きる人間にも原始人から遺伝した本能的動物性が残っているというモチーフが散見されるのである。

他方、作中人物に対する環境の影響を重視する姿勢は、『野心』(1902年4月刊)の執筆に生かされている。だが、作中人物の外見や性格が居住環境の特性から直接的に引き出されているかのように描こうとするあまり、今日の視点からは科学的とは言えない描写になっている。ただし、このような描写は、他の点でも『野心』に強い影響を与えたとされている『ボヌール・デ・ダム百貨店』(*Au Bonheur des dames* 1883)でも行われていた。実際、ゾラの文学的な実践のなかには自然主義理論の枠に収まらないものが多くあり、そのような部分を下敷きにして執筆した場合、荷風の作品が自然主義的な規範から逸脱してゆく傾向を見せるのも無理からぬことであった。『地獄

の花』の幻想的な描写や『夢の女』(1903年5月刊)における長大な描写は、ゾラの文学理論とは相容れないが、それぞれ『ムーレ神父のあやまち』(*La Faute de l'Abbé Mouret* 1875) や『愛の一ページ』(*Une Page d'amour* 1878) における描写を前提としていると推定される。

このような内容面における荷風へのゾラの影響に加えて、第三章では、文体やナレーション技法の面での影響を探っている。ゾラの作品のなかでは、頻繁に自由間接文体 (*le style indirect libre*) と呼ばれる特殊な文体が用いられている。語り手が作中人物の言説を引き受けて語るこの文体では、文脈から判断できない場合、ある言説が語り手に属しているのか作中人物に属しているのかが曖昧になる。こういった「二重の声」による語りの特性が見事に生かされているのが『パスカル博士』(*Le Docteur Pascal* 1893) の末尾で用いられている自由間接文体であり、語り手と作中人物が物語の最後において心理的に融合するさまが文体レベルでも達成されている。このような語り手と作中人物の融合は、荷風も『地獄の花』の末尾で試みるところである。

以上のような考察を踏まえて、荷風がゾラから学んだものは自然主義理論だけにとどまらなないと本論文は指摘する。荷風が自然主義を否定しゾラを批判するようになってからも、ゾラの文学的実践がすべて否定されるには至らなかった所以である。ゾラからの自然主義理論以外の影響は、程度の差こそあれ荷風の文学のなかに存続し、時には重要な役割を果たすこともあったのである。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、永井荷風の初期作品におけるエミール・ゾラの影響を解明することを主眼としている。荷風のゾライズムに関しては、すでに相当数の先行研究が存在する。だが、これらの研究には、荷風の初期作品におけるゾラからの影響の一側面に特化しているもの、荷風の初期作品を彼の主要な文学的実践から切り離してしまっているもの、荷風の初期作品執筆当時の日本における文学的潮流のほうに関心が向いているものなどが多かった。こうしたなかで、本論文は、荷風の初期作品自体の考察を目的とし、かつ、この研究対象を多角的に分析した数少ない論考である点が特に注目される。

本論文の第一の成果は、ゾラのフランス語原文や、荷風が読んだと考えられるゾラの作品の英訳といった外国語資料の参照が不十分であるという、従来の研究が抱えていた問題はかなり克服した点である。本論文では、これらの外国語資料を丹念に分析し、ゾラの原文の特徴、その英訳の質、さらには初期作品執筆当時の荷風の語学力をも考慮することで、ゾラの手紙が荷風に届くまでの言葉のリレーを精密に追跡している。一部の英訳のエディションについては完全には特定に至っていないものの、異なるエディションのテキストを比較し、荷風が各エディションに対して下した評価などにも目配りすることによって、不確定要素を能う限り排除している。このような作業により、荷風の初期作品とゾラの作品との、より精緻な比較が可能になった。

本論文の第二の成果は、ゾラのさまざまな作品において作中人物が語る言説から荷風が主に科学的要素を摂取したことを指摘し、そこから学んだ生理学、遺伝学、精神医学、社会学の諸要素が荷風の初期作品の中にどのように取り込まれているかを具体的に明らかにした点である。荷風の初期作品におけるゾラの影響として先行研究において最も頻繁に言及されてきたのは、荷風によるゾラの自然主義理論の受容、すなわち科学を小説に応用するというコンセプトに関するものであった。しかし、それらの研究では、多くの場合、荷風が自然主義理論を摂取した経路が特定されていなかったために、ゾラの多様な自然主義理論の中で荷風がどの要素を取り入れたのかが曖昧なままであった。これを本論文はテキストに即して明確化している。さらに、フランスにおける近年のゾラ研究では、ゾラの理論が必ずしも完全にはゾラ作品に応用されていないことが指摘されているが、ゾラにおける理論と実践とのある種の混淆が、荷風の初期作品のテキストにもたらした影響を跡づけている点も、本論文の斬新なところである。

本論文の第三の成果は、先行研究の蓄積を踏まえながら、それらの指摘に検討を加え、荷風の初期作品の再評価に貢献しただけでなく、先行研究では採用されることのまずなかった極めて独創的な視点から分析を試みた点である。とりわけ、ゾラが用いた自由間接文体によるナレーションの荷風の受容は、荷風に関する先行研究において類例を見ないものである。このような文体論的視点に立って、ゾラから荷風への言葉のリレーがどのように成立したかについて詳細に考察することにより、本論文は、荷風が文体やナレーション技法の面でもゾラから多くを学んでいることを初めて明らかにしたといえる。

氏 名	林 信 蔵
-----	-------

本論文の第四の成果は、荷風がゾラからの影響を相対化した後に執筆した作品においても、なおそれが存続していることを具体的に検討した点である。このようなゾラの影響の存続はすでにいくつかの先行研究において示唆されてきた。だが、それらの先行研究においては、ゾラの影響自体が的確に把握されていないために、形を変えて存続しているものについては十分に捉えられてこなかった。本論文では、ゾラの影響が相対化されたと考えられている時期に執筆され、自伝的言説に近く、表面上はゾラの影響が顕著には見られない作品の中に隠されているゾライズムの要素を抽出している。

以上のように、本論文は、ゾラのフランス語原文や、荷風が読んだと考えられるゾラの作品の英訳といった外国語資料の詳細な分析を基礎に、フランスにおけるゾラ研究の進展・成果を踏まえ、文体論的考察を含めて、多面的で独創的な論考を展開し、荷風の初期作品におけるゾラの影響の研究に新しい知見をもたらした卓抜なものであるといえる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成 21 年 1 月 28 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。